ある「啓示」のまえに——生誕 101 年 松澤宥展によせて

細谷 修平

色を見て下さい、松沢さんは大変な色彩家です。絵にとって色は、料理にとっての味と同じです。——今泉省彦「松澤宥について」[1]

2022 年に長野県立美術館において開催された「生誕 100 年 松澤宥」展は、松澤宥という作家の生涯にわたる表現活動を丁寧に追うことにより、「概念芸術の祖」、「表現共同体のオルガナイザー」といった松澤宥をめぐる固着した「神話」を脱神話化する果敢な取り組みであった。また、近年においては、松澤のもとに残されていた膨大なアーカイブズの整理も進んでおり、Japan Society で開催された「Radicalism in the Wilderness: Japanese Artists in the Global 1960s」（2019 年）など国外における展覧会での紹介や、美術史家の富井玲子による長年の調査・研究によって、新たなる国際的な再評価への道が切り拓かれてきている。

松澤宥という作家は敗戦後、長野県下諏訪をベースとして、近代物質文明への批判をそのアートワークによって提示し続けた。「不可視」と「非物質」を掲げて近代文明批判へと進んだ松澤の出発点は、1950 年代半ばの研究留学の際に知識を得た超心理学であり、そこから抽出された「見えないものを観るため」[2] の能力、プサイ（ψ）の発見であった。さらに松澤は、1964 年 6 月 1 日の未明に「オブジェを消せ」という声を聞いたというエピソードを語り、「啓示」を受けたことを表明した。実際のところ、この「啓示」についてが語られるのは 70 年代に入ってからであるが、松澤は自身の物語りあるいはアートワークの規定として、1964 年を置いた。1964 年という年は、読売アンデパンダンの中止が発表された年であり、地方の前衛芸術が突出し始めるとともに、松澤自身によって「荒野におけるアンデパンダン’64 展」が企画された年である。これを一つの起点として、松澤のアートワークは紙をメディアとしたことばの発生と想起によるコミュニケーション、観念芸術のほうへと向かっていき、その後は、いわゆるニルヴァーナ派の同志との活動やレシタシオンとしての行為表現へと展開していった。

さて、今回展覧される作品は、制作年が判明している作例とともに鑑みると、松澤が「啓示」を受けるまえ、1950 年代後半から 1963 年ごろの作品と考えられる。冒頭に掲げたのは、現代思潮社美学校の事務局長であった今泉省彦が同社の代表・石井恭二を松澤邸宅に連れて行った際に今泉が石井にささやいたことばであるが、1961 年の『現代美術の実験展』（東京国立近代美術館）で松澤の作品《プサイの函》や《プサイの意味》を観ていた今泉がその色彩に惹かれた様子がうかがえる。

今回の展覧によって、わたしたちもまた松澤作品がもつ色の深みと求心力を体感することができるだろう。さらには、松澤がその宇宙感を作品の構図とした金剛界曼荼羅（九会の格子）の作用、エロスイメージあるいはシュルレアリスムを想起させるコラージュの潜勢力を各々のプサイ（ψ）によって「観る」ことができるかもしれない。

松澤宥生誕 100 年目においてようやくその思想と実験の数々が明らかとなりつつある今日、そして物質文明の黄昏を迎えるいま、松澤のアートワークを「概念芸術＝ことばの芸術」といった安易な了解に落とし込めていてはならない。本展に立ち会うわたしたちがあの「啓示」のまえから出発することで、松澤宥との 101 年目のコミュニケーションを本質的に開始する機会となればと願っている。

（美術・メディア研究者）

---

1. 機關編集委員会編『機關 13 松澤宥特集』（海鳥社、1982 年）
2. 富井玲子「見えないものを観るために――世界美術史から読み直す松澤宥のラディカリズム」
長野県立美術館『生誕 100 年 松澤宥』図録（2022 年）を参照されたし。